月刊都響

June 2023

ヤングシート

気を付けてね！ ホールでの過ごしかた

〇携帯電話や音が鳴るモノは電源を切りましょう。
〇演奏中はお話しないで静かに聴きましょう！
　周りの人も演奏を楽しみに来ています。
〇録音・録画、写真撮影は禁止です。

2023
6/25

Subscription Concert

第977回定期演奏会Cシリーズ

会場：東京芸術劇場コンサートホール

指揮／マルク・ミンコフスキ

♪ブルックナー：交響曲第5番 変ロ長調 WAB105
（ノヴァーク版）（約80分）

東京都交響楽団

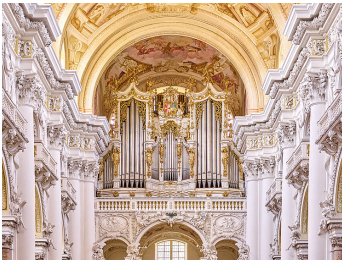
PROGRAM NOTES

来年2024年は、オーストリアの作曲家アントン・ブルックナー（1824～1896）が生まれてから200年目にあたります。メモリアル・イヤーに先駆けて、今日はブルックナーの交響曲の魅力に迫りましょう。

◆ブルックナーってどんな人？

聖フローリアン修道院

ブルックナーは、少年時代から大人になるまで、故郷リンツの郊外にある聖フローリアン修道院の教会で、合唱団メンバー、オルガン奏者として音楽を学びました。この修道院はのんびりとした田舎にありますが、皇帝が滞在する宮殿も兼ね備えたとても立派な建物で、ブルックナーが弾いていたオルガンも7000本以上のパイプを持つ巨大な楽器です。


聖フローリアン修道院のオルガン【ブルックナー】

20代のころブルックナーは、リンツで学校の先生として働き、すぐれたオルガニストとしても知られるようになります。でも、もっと音楽を学びたい！という気持ちが高まっていきました。31歳になったとき、ついに音楽の都ウィーンで本格的に作曲の勉強も始めます。大作曲家というと「幼いころから天才」といったエピソードをよく耳にしますが、30代から本格的に音楽を学んだブルックナーは遅めのスタートで、しばしば“大器晩成型”（普通よりも遅くに成功すること）と言われています。

とはいえ彼は、オルガン奏者としてはますます有名になり、フランスやイギリスにも招かれて演奏をしました。また、44歳の時にはウィーン音楽院の教授にもなりました。田舎出身の控えめなキャラクターだったと言われるブルックナーですが、宮廷オルガニストの地位を得たり、晩年にはベルヴェデーレ宮殿の一室を住まいに与えられるなど、ウィーンの人々の尊敬を集めた作曲家なのです。

◆ブルックナーの交響曲

ブルックナーは、ミサ曲やオルガン曲など数々の宗教曲を残していますが、ウィーンを拠点とした40代からは、オーケストラを壮大に鳴り響かせる交響曲の作曲に集中していきました。晩年の手紙の中で、「私はあくまで交響曲作家なのだ」、交響曲を書くことは「自分の一生をかけた仕事だ」と述べるほど全力を注いだのです。思いの丈をたっぷりと詰め込んだ彼の交響曲は一曲がとても長く、それまでの交響曲のイメージを変えてしまうほどの規模となりました。書き終わってからも、何度も入念に書き直したため、後の世の研究者たちが整理してまとめましたが、「ハース版」や「ノヴァーク版」など複数のバージョンがあります。

ブルックナー
交響曲第５番 変ロ長調 WAB105（ノヴァーク版）

　すごく長くて、しかも思い入れたっぷりの交響曲……途中で聴き疲れてしまったらどうしよう……なんて不安にならなくても大丈夫。ずーっと必死に集中しようとは思わずに、その時々に聞こえてくる綺麗なメロディーや柔らかなハーモニーがが美しいなぁとか、金管楽器の飛び出すようなファンファーレがかっこいいなぁとか、弦楽器の繊細な動きが素敵だなぁとか自由に感じ、自分なりのイメージを膨らませて楽しんでください。

　1875年、ブルックナーが50歳で作曲を始めた第５番は、11作あるブルックナーの交響曲の中でも特に長大で、今日はこの１曲しか演奏されません。でも、曲は４つの楽章で構成されていますから、それぞれの豊かなドラマを味わってみましょう。

第１楽章 とても静かな序奏で、長い物語の始まりが告げられます。突然堂々としたモチーフが登場し、希望と不安が行ったり来たりするような、ドラマティックな展開が繰り広げられます。

第２楽章 弦楽器のピッツィカート（指で弦を弾く奏法）と、悲しげなオーボエのメロディーで開始します。やがて登場する流麗な主題は優しくも力強く、オーケストラの醍醐味を味わえる感動的な響きで包まれます。

第３楽章 第２楽章とは対照的に、スピーディーでスリリングに開始しますが、すぐに音楽は明るい雰囲気に。リズミカルに表情を変えながら祝祭的な雰囲気も出てきます。ホルンと木管楽器から提示される中間部は、ほのぼのとした曲想です。

第４楽章 大曲の最後を飾るフィナーレです。序奏のあとに、クラリネットからおどけたようなモチーフが提示されたり、弦楽器が流れるようなメロディーを聴かせたり、金管楽器の壮大なコラール（讃美歌のような響き）が登場します。同じメロディーが高さを変えて次々と現れて、重なるようにして音楽を織り上げる「フーガ」という手法も使われた、カラフルに鳴り響く終楽章です。

文／飯田有抄（クラシック音楽ファシリテーター）

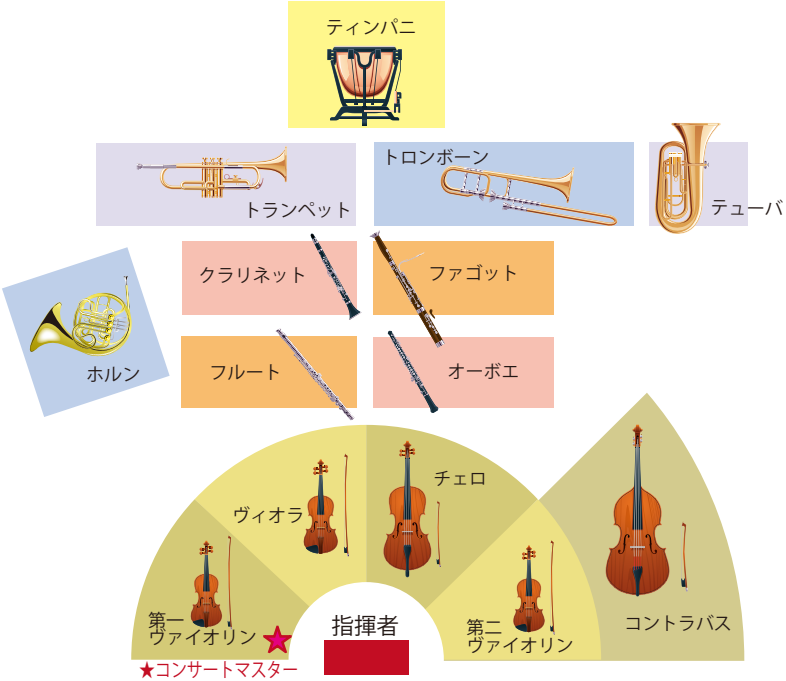
指揮 マルク・ミンコフスキ　Marc MINKOWSKI, Conductor

　1982年に19歳でミュジシャン・デュ・ルーヴルという古楽器オーケストラを創設。フランス大西洋沿岸のレ島にレ・マジェール音楽祭を設立したりザルツブルク・モーツァルト週間の芸術監督を務めるなど意欲的に活動し、レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、マーラー室内管弦楽団などを指揮する他、現在はボルドー国立歌劇場総監督、オーケストラ・アンサンブル金沢の桂冠指揮者を務めている。都響へは2014年に初登壇、今回が５度目の共演となる。

©Benjamin Chelly/les Echos

オーケストラ配置図（6月25日 第977回定期演奏会Cシリーズ）

演奏する曲によって使わない楽器もあります。
どの曲にどの楽器が使われているかにも注目してみてね。



※楽器の配置は一例です。当日のステージで確認してください。

TMSO

東京都交響楽団

　東京オリンピックの記念事業として1965年に東京都が設立しました。都響（ときょう）という愛称で親しまれています。

　上野の東京文化会館を本拠地として、サントリーホールや東京芸術劇場などで定期的にオーケストラの演奏会を開催しています。その他、交響組曲『ドラゴンクエスト』（全シリーズ）や『Fate/Grand Order』などゲーム音楽の演奏や、都内の小中学生を対象に開催している音楽鑑賞教室、病院や福祉施設への出張演奏など多彩な活動に取り組んでいます。

　2021年7月に開催された東京2020オリンピック競技大会開会式では、「オリンピック賛歌」の演奏（大野和士指揮／録音）を務めました。